



特別展

HELLO! えひめの企業アートコレクション ひろがる美のかたち



加山又造(昭和19年)「暹羅猫」(愛媛県美術館蔵)



大野俊典(戦国)「魚」(愛媛県美術館蔵)



三浦保(昭和17年)「夢」(1994年)「三浦保」(三浦美術館蔵)



中山創(明治6年)「松山」(伊予銀行蔵)

祝
海南新聞
と松山
昔入り子
風染花
語

河津徳福(昭和19年)「祝海南新聞」(1971年)「松山」(伊予銀行蔵)

2022年2月1日(火)~3月21日(月祝)
本館1F企画展示室

本展は、県内企業や団体等の皆様のご協力のもと、そのコレクションを一堂で紹介する展覧会です。展覧会の実現に向けて、多くの皆様に所蔵作品の調査を依頼し、数多くの素晴らしいコレクションに出会うことができました。

展覧会の構成に沿って本展の内容を紹介します。

1章 愛媛県美術館所蔵 一企業コレクションゆかりの作品

1970(昭和45)年に当館の前身である愛媛県立美術館は、県内の数多くの企業や団体等の支援を受け誕生しました。そしてこれら企業等の皆様より寄贈された作品群が礎となり、現在の充実したコレクションへと発展してきました。ここでは、畦地梅太郎、エミリオ・グレコ、野間仁根、正岡子規など企業コレクションゆかりの作品を展示します。

2章 ミュージアムズ セキ美術館とミウラート・ヴィレッジ(三浦美術館)

県有数の企業であるセキ(株)と三浦工業(株)が母体となるこれらの美術館は、20年以上もの間本県の芸術文化の向上に貢献してきました。両館の珠玉のコレクションの中から、セキ美術館からは、館の題字も手掛けた重点作家のひとりである加山又造の「暹羅猫」を始め、横山大観や岡鹿之助など、創設者であり館長の関成氏が収集した優品を、またミウラート美術館(三浦美術館)からは、自ら作家としても活躍した創設者の三浦保氏の作品や、ギリシャ陶器、アントニ・タビエスなど三浦氏が独自の審美眼で収集した作品を紹介します。

3章 県内企業コレクションの名品たち

県内企業の美術コレクションを「おもてなしの文化」「社史を彩る美術」「芸術愛好・パトロネージ」の3つの視点により展示します。

「おもてなしの文化」では、道後のふなや、ホテル古湧園 遅、大和屋本店、そして西予市卯之町にある松屋旅館、これら本県の観光業を支える企業の皆様より、ゆかりの作品や、客人への心づくしの美術品を紹介いたします。

また「社史を彩る美術」では、企業の歩みと美術とのつながりに着目します。例えば、(株)愛媛新聞社(当時海南新聞)の創刊1万部を祝した河東碧梧桐の句の背景には、「ホトギス」を刊行した柳原極堂を擁し、俳諧を全面で支えた同社の営みが伺えるでしょう。井関農機(株)、NTT西日本四国支店、南海放送(株)、(株)八西ホンダ、各ゆかりの作家の作品も合わせて紹介します。

「芸術愛好・パトロネージ」では、長年文化事業に力を入れてきた(株)愛媛新聞社、(株)テレビ愛媛、南海放送(株)ならではの作品や、井関農機(株)、(株)サンメディカル、星企画(株)など特定の作家との親交がその特徴であるコレクション、また門多瀧網(株)、(有)河野からは直接ゆかりがある三輪田俊助の作品を紹介します。さらに、(株)伊予銀行、(株)愛媛銀行、愛媛信用金庫、(株)オオノアソシエーツ、(株)九一、大ーガス(株)、藤井(株)、(株)松山建設社、(株)松山大洋工業など、各社特色ある素晴らしい美術品の数々が収蔵されています。

本展で魅力ある県内企業コレクションを広く紹介することにより、本県の豊かな芸術文化を改めて見出し、次世代へと引き継いでゆく契機となれば幸いです。(杉山はるか)

コレクション展

愛媛県美術館コレクション展V 屏風Traveling II

—展示室でゆっくり・じっくり「船」の旅—

2022年1月5日(水)~3月7日(月)

愛媛県美術館では1月5日(水)~3月7日(月)まで「屏風Traveling II」という小さな展覧会を開きます。展示室では前回と同じく「国内旅行」「海外旅行」「時間旅行」をテーマに屏風の他、軸も合わせて日本美術の世界をご紹介します。

最寄りの「渡し船乗り場」を経て、「宇和島港」から乗船したら、江戸・昭和の東京・ニューヨークの街に向けて旅立ちます。そして、船旅ですから、途中(大きな荷物は船に置いたまま、身軽になって)下船して、江戸のお祭りや不思議な「場所」を探検します。各作品のそばには、作品をみた皆さんの言葉が添えられています。

ゆらゆら船に揺られながら、さまざまな視点を交えた、展示室での小さな「船の旅」をお楽しみください。最後に、この「船旅」は期間中、毎日「宇和島港」から開催しています。どうぞお気軽にご乗船ください。みなさまとお会いできることを楽しみにして、2階常設展示室1にて、お待ちしております。(ケンビ旅行社ツアーコンダクター：鈴木有紀)



つぶやき



職員紹介

早いもので就任して1年が経とうとしています。この1年間、慣れないことばかりで毎日が勉強でしたが、この経験を来年度に活かし、ご来館いただいた皆様に、より変らざる時間を提供する一助となれるよう努力していきたいと思っております。今後ともよろしくお願ひします。(神田亜紗子)

ご利用案内

- 開館時間 9:40~18:00(入室は17:30まで)
※企画展及び貸展については、入室時間が異なることがあります。
- 休館日 月曜日
(祝日、振替休日及び第1月曜日に当たる場合は開館し、その翌日が休館日。年末年始は12/29~1/3が休館日)

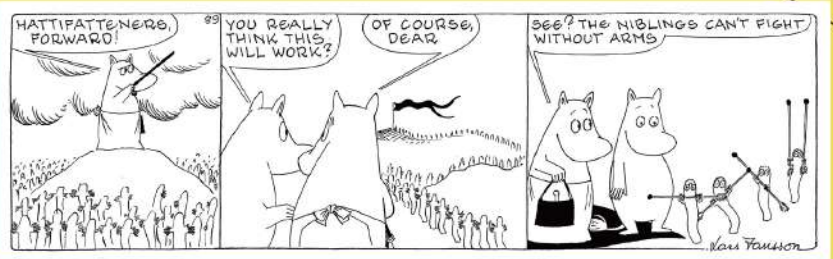
編集後記



今年度最後のカンフォロが無事に完成いたしました。展示内容では、昨年度開催延期となった「名刀は語る展」が、4月から開催されることになりました。たくさんのお客様に楽しんでいただけるよう頑張ります！(青木朋子)

ムーミン コミックス展

2022年4月2日(土)~5月29日(日)
本館2階[常設展示室1・2]



ラルス・ヤンソン「ムーミンたちの戦争と平和」原画(1974年、インク、紙)
©Moomin Characters™



日本では主に童話や絵本、アニメで親しまれてきたムーミン。しかし、その世界的人気に大きく関係したのは、コミックス(漫画)でした。

ムーミン童話の原作者トーベ・ヤンソン(1914-2001)によるムーミンコミックスが初めて公表されたのは1947年、スウェーデン語を母語とするフィンランド人向けの「ニィ・ティド」紙上でした。その後1954年より、当時世界最大の夕刊紙として知られたイギリスの「イブニング・ニュース」紙で連載が始まります。これに協力したのが弟ラルス・ヤンソン(1926-2000)です。ラルスをはじめ、スウェーデン語系フィンランド人であったトーベのスウェーデン語の台詞の英訳などを担当していましたが、姉の作画指導を受けた後、1960年には一人でコミックスの仕事を引き継ぐまでにになりました。

ピーク時に世界各国の120紙に掲載されたコミックスですが、日本での紹介はようやく2000年以降に一部邦訳が単行本として出版されるようになった次第で、まだまだコミックスを知らない人もいますことでしょう。

本展では、フィンランドのムーミンキャラクターズ社が所蔵する、トーベのドローイング・習作など99点、ラルスの原画180点を展示します。いずれも日本初公開です。自由と平和、自然を愛したトーベとラルスによる、動きがあって生き生きしている、ユーモアあふれるムーミンコミックスの世界を、どうぞご堪能ください。(武田信孝)

トーベ・ヤンソン「寒いこの火星人」スケッチ(1957年、インク、紙)
©Moomin Characters™



トーベ・ヤンソン(左)とラルス・ヤンソン(右) ©Moomin Characters™

名刀は語る展

2022年4月16日(土)~6月12日(日)
本館1階[企画展示室1・2]

名刀が美しい輝きを放っているのは、鍛冶されてから今日に至るまでの数百年の間、絶えず日本刀を守り、磨き続けていた人々の手があったからです。

本展では、日本有数の刀剣コレクションを誇る佐野美術館の収蔵品から、平安時代から江戸時代にかけての国宝・重要文化財に指定されている刀剣、刀装具、約100点を展示します。なかでも長篠の戦いの武功として織田信長から奥平信昌に与えられた国宝「太刀 銘 一」は、実に36年ぶりに愛媛で展示されます。

さらに「刀剣乱舞」のキャラクターにもなった、本多忠勝愛用の名槍「蜻蛉切」、重要文化財「松江江」といった珠玉の名品たちも展示されるほか、伊予今治城主藤堂高虎が所有した名刀「正宗」(重要文化財)といった愛媛ゆかりの刀剣が県内初公開されます。「正宗」の展示期間は、4月16日から5月13日までです。

また伊佐間波神社・東雲神社に伝わった名刀(重要文化財)を、本展にあわせて特別公開します。約千年にわたる日本刀の歴史を通じて、日本人が培ってきた美意識や文化をお伝えすることができれば幸いです。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、昨年度は惜しくも開催延期となってしまいましたが、よりよい展覧会となるよう努めております。皆様にご覧いただける日が楽しみです。(青木朋子)



リモートイベント アーティストトーク

コロナ禍における新たなスタイルのイベントとして、リモート出演による郷土作家のアーティストトークを企画しました。講師は、第1回目(12月25日)が八木良太氏(現代美術家)、第2回目(1月23日)が有元容子氏(日本画家)、第3回目(2月20日)が山田彩加氏(版画家)。第1回目の八木氏は所属する無人島プロダクションのオーナー藤城里香氏との対談方式で実施。八木氏を古くから知る藤城氏ならではの視点で作家の魅力を引き出していただき、八木氏の知覚に働きかける作品についてお話をうかがうことができました。(高木学、石崎三佳子)



オンライン
対話型鑑賞授業が
スタートします!

美術館では、この1月から県内島嶼部・山間部の小中学校を中心に、オンラインでの対話型鑑賞授業の試みを始めます。お近くの先生方、ぜひ、一緒に県美と授業研究しませんか? (鈴木有紀)